

〈研究ノート〉明治期における尾崎行雄の選挙 (2) : 好友会の盛衰

渡辺, 穰 / WATANABE, Yutaka

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

2008-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011568>

研究ノート

明治期における尾崎行雄の選挙（二）

— 好友会の盛衰 —

渡 辺 穰

はじめに

尾崎行雄やその後援会組織を扱った先行研究には、『尾崎行雄の選挙』『罌堂尾崎行雄』『人物叢書尾崎行雄』などの優れた著作がある。これらの研究は、ほぼ尾崎行雄側からの視点により、尾崎の国会での演説、政策や所属政党における行動などに関心が寄せられている。確かに、尾崎行雄は明治・大正・昭和と憲政史上において最も長く議員を務めた人物で、「憲政の神様」と称されたような政治理念に共鳴できる部分が多いのであろう。また「罌堂会」という強力な後援会があり、坂上順夫『尾崎行雄の選挙』は罌堂会式理想選挙に主軸を据えた労作である。だが、その尾崎を支えた罌堂会という存在が初めて確認されるのは大正

四年となる。明治・大正・昭和と衆議院議員を務めた尾崎にとつて、罌堂会は大正期から晩年にかけての後援会組織と言える。

では、明治期の尾崎には罌堂会に類するような後援会組織が存在せず、強固な地盤もなく選挙に挑み続けたのだろうか。そのようなことは全く考えられず、明治期においても尾崎には強力な後援会が存在していた。それが「好友会」である。しかし、成立や解散の過程はおろか「好友会」という名称でさえ、前記三冊を始めとする先行研究はもとより、『尾崎行雄全集』『尾崎罌堂全集』にすら見受けられない。筆者は、拙稿「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」〔明治期における尾崎行雄の選挙（一）〕³⁾において好友会を初めて取り上げたものの、それは間接的な紹介に過ぎず、

全貌解明には至っていない。そこで本稿では、囀堂会発足の約二〇年前から存在した好友会という組織に主軸を置き、どのような経緯で盛衰し、また尾崎や三重県にとって如何なる存在であつたかなどを明らかにしたい。

なお、明治期における尾崎の選挙区は三重県第五区（小選挙区制）であり、度会・志摩・南北牟婁の南勢四郡を範囲とした。第五区はいわゆる「二人区」である。明治三五年の第七回総選挙からは、郡部選挙区（定員七人、大選挙区制）となる。

一 好友会の発足

（一）第一・二回総選挙

第一回総選挙の時期では、まだ「好友会」という名称は確認できない。しかし初の総選挙となる明治二三年に向かうような形で、度会郡やその周辺での政治組織結成が活発となる。⁽⁴⁾第一回総選挙を見据えた組織化は、投票日が近づくに随つて、改進黨派と自由党系愛国公党派・大同派に分裂を始める。⁽⁵⁾そして愛国公党派と大同派が候補者選定に行き詰まり、改進黨の候補者を支援するに至つた。尾崎は容易な当選であつたことを自伝に記している。⁽⁶⁾それは、愛国公党派・大同派が組織として未熟だったこともあるが、尾

崎派とも言うべき改進黨系支援組織の萌芽が大きな原因であろう。このような機運を受け、第一回総選挙の後に第五区で政治結社が図られた。⁽⁷⁾名称は附せられていないものの、その中心人物に後述する森本確也や白井清栄門などの名前があることから、これが好友会の原型と推測される。

なお、尾崎が三重県第五区を立脚地として選んだ理由は、父・尾崎行正の薦めとされている。自伝でも「父は三重県で役人をしていたところから、殖産事業に熱心で、県内の各地を歩いて、有志の家などに泊り、方に知合が多かつた」といった記述が見られる。実際に、行正は明治一七年に成徳社という組織を設立するなど、度会郡での養蚕や茶を中心とした殖産興業に影響を与えた。しかし、徳育や殖産興業への寄与だけで、地盤が構成できるとは考えづら。恐らく、行正には何らかの政治的影響力があつたものと推測される。⁽⁸⁾

明治二五年に行われた第二回総選挙は、政府による選挙干渉として著名であり、尾崎も自伝で辛酸したことを述べている。⁽¹⁰⁾ただし、図1②に明瞭であるが、第五区には吏党候補が居らず、過度な干渉が行われたとは考えづらい。尾崎への選挙活動妨害は、官憲よりも地価修正問題により對抗していた自由党側であつた。第二回総選挙での特性は、

選挙干渉よりも、むしろ支援組織確立にあったと言える。自由党側は、宇治山田の高木貞太郎と、南牟婁郡の竹原樸一⁽¹⁾が提携に齟齬を来たし、揃って尾崎に屈した。自由党候補者を押さえるに至った原因は、組織力の差でもあろう。このような尾崎派の支援組織確立は、県会や宇治山田町会へも影響を与えた。総選挙終了直後に行われた二月二十五日の県会選挙では度会郡選出四名中の三名が「図2」、三月二三日の宇治山田町会選挙では一六名中の一名が尾崎派で占められた。⁽¹²⁾ 尾崎派の進展は、ついに正式な支援組織である好友会を四月一七日に誕生させた。⁽¹³⁾

(二) 好友会の構成

好友会とは、尾崎の中核地盤たる度会郡や、その首邑である宇治山田町を拠点とした、改進黨系（後に進歩党、憲政本党）の尾崎支援組織である。第一部が宇治山田町と隣接する伊勢湾沿海地区町村、第二部が宮川を越えた小俣村・城田村・外城田周辺・田丸町などの北西地域、⁽¹⁴⁾ 第三部は熊野灘に面した南島地域、第四部は北牟婁郡に近い大内山村などの山地帯、という構成になっていた。⁽¹⁵⁾

そのような好友会を率いる領袖は白井清栄門⁽¹⁶⁾であった。合わせて、同じ五区内の志摩郡に居住する森本確也⁽¹⁷⁾を客員

顧問格といった扱いで推戴している。「森本確也宛尾崎行雄書簡」No. 24には、宛者が森本・白井を含めて八名も記載されているが、これが好友会の枢要構成員と考えられ、その氏名・職業は、白井（三重銀行頭取）・山羽九郎兵衛（三重銀行取締役）・森本（三重銀行取締役）・辻村弥八（三重銀行の傘下にあった度会商工銀行頭取）・伊藤丈吉（神宮皇學館教授）・尾崎二呉⁽¹⁸⁾（呉峰）⁽¹⁹⁾（弁護士）・船越楫吾（弁護士）・浅沼直（弁護士）、となる。森本を除いた全員が宇治山田町在住で、職業も三重銀行関係の実業家と弁護士などに分けられる。明治期の尾崎は、このような第一部好友会枢要メンバー、すなわち伊勢神宮門前町で三重県下でも有数な人口を誇る宇治山田の金融関係者と弁護士などに選挙を支えられたと言える。

なお、一部好友会枢要メンバーとしては、吉沢重⁽²⁰⁾・浜田国松⁽²¹⁾・佐伯市太郎⁽²²⁾・杉木斉之助⁽²³⁾なども挙げることができる。同じ一部でも、宇治山田町以外の沿海地区では、例えば大湊町長の山中崔十⁽²⁴⁾がいるものの、どちらかと言えば中核から外れている。三部は、選挙民も少なく有名無実に近い。四部は、有権者の少ない山村ながら山林地主が存在し、大内山村の乾逸太郎⁽²⁵⁾が実質的な代表である。一部に次

第5区	森本 確也 尾崎 行雄 奥野 次郎 竹原 博一 角利 助	1,762 1,461 314 143 12	憲本 憲本 憲 憲 憲
-----	--	------------------------------------	-------------------------

⑨ 第9回総選挙 M37.3.1			
郡部	7	<input type="radio"/> 尾崎行雄 <input type="radio"/> 大井士郎 <input type="radio"/> 連木熊太郎 <input type="radio"/> 森茂生 <input type="radio"/> 辻寛 <input type="radio"/> 栗原亮一 <input type="radio"/> 浜田国松 <input type="radio"/> 海野藩次郎	3,347 無名 2,976 甲辰 2,862 甲辰 2,719 甲辰 2,603 甲辰 2,590 甲辰 2,494 甲辰 1,846 甲辰

図1 明治期尾崎行雄選挙得票数

⑫	第1回総選挙	7	尾崎行雄	8,432	中
		○	小林蘆子台	6,846	
		○	重盛信彦	4,813	
		○	浜田国松	4,142	国
		○	川崎吉	3,130	中
		○	加賀克之吉	2,840	同
		○	注意	2,752	同
		○	川村肇	2,342	致死
		○	横山正四郎	1,931	
		○	仁保甲哉	1,698	
		○	野村中子郎	810	同

[illegible]

組織力を有するのが二部であり、有権者数では一部を凌いでいる。田丸町喜多正兵衛・城田村高瀬章二・小俣村野呂巽之助などを代表格とするが、これら二部主要構成員は、度会郡茶業組合に属しており、養蚕や茶への殖産に深く関係した行正の影響を強く受けていると想像される。実際に、高瀬は行正宅の近傍に居住しているようであり、尾崎と行正とのパイプ役に任じていた節がある。²⁶⁾

二 好友会の進展

(一) 第三・四回総選挙

明治二七年に行われた第三回総選挙は、尾崎の回顧によれば、今までの選挙戦の中で最も苦しいものだったと述べられている。²⁷⁾ その理由としては、慶応義塾の先輩・恩師であった門野幾之進が、自由党側から対立候補として出馬したことが原因とされる。神奈川県津久井郡生誕・下級士族子息の尾崎に対し、門野は五区内の志摩郡鳥羽町出身で、家老職の家柄をも有する。その鳥羽に位置する旧答志郡は、同じく鳥羽出身である栗原亮一²⁹⁾の影響下にあり、自由党勢力が強い場所でもあった。

しかし、第三回総選挙の特性は、自由党との関係悪化が要因であったと言える。明治二六年四月に集会及政社法が

改正され、地方支部の設置が政党に認められることとなった。組織の進展や活発化した党員活動は、政策の違いとも合わせて自由党との関係悪化に繋がった。それは第五区でも顕在化し、改進黨・自由党の双方が「二人区独占」を企図したことは想像に難くない。尾崎への揺さぶりもあり、門野の出馬に結実したのであろう。

このような状況で、尾崎は森本への改進黨入党・出馬を打診し、了解された。自由党側も、門野の他に奥野市次郎²⁰⁾を出馬させた。好友会に対抗する自由党側の組織は「正義会」であり、栗原の意を体する杉木斉之助が領袖の地位にあった。第三回総選挙とは、「恩師の出馬で悩む尾崎」といった単純さではなく、「好友会と正義会の本格的な激しい選挙戦」が大きな特性であった。

自由党側は「自由改進黨それぞれ一名」との妥協を提案したが、尾崎に一蹴された。³¹⁾ 詳細は確認できないものの、選挙戦は尾崎に有利な状態が濃厚となり、焦点は二位当選を巡る「森本と門野の一騎打ち」に推移した。結果として森本が僅差で逃げ切り「図1③」、第五区は改進黨の牙城となった。続く県会選挙でも度会郡区は二名とも好友会で占められ「図2」、ここに正義会の一方的な敗北が確定された。

第三回総選挙後に開かれた第六議会は、外交問題で政府民党間の激しい攻防となり、伊藤博文内閣は議會を解散した。しかし、八月一日に清国へ宣戦布告したため政争は中断され、挙国一致体制に移行した。その影響を受け、第四回総選挙は平穩無事に終了し、第五区でも前回のような激しい選挙戦は行われなかった。第四回総選挙の詳細は不明であるが、尾崎の帰県が確認できない。確かに、政争のない緩やかな選挙戦でこそあったが、対抗すべき自由党の側に熱意がなかったことも事実であろう。このことは、尾崎側から見れば、対自由党戦を完全に征し、帰県しなくとも当選可能なほどの地盤確立を意味する。そして、それは森本と白井以下の好友会に地盤を依拠する態勢が完全に確立されたとも言えよう。

(二) 第五・六回総選挙と憲政党合同

明治二九年三月に改進黨は進歩党へと発展的解消を遂げ、明治三十一年三月には進歩党として臨む第五回総選挙が行われた。この頃になると、尾崎と森本は実質的に進歩党三重県支部の役割を果たしており、自身の立脚する第五区のみならず、県内全域での進歩党勢力拡張にまで手を広げていた。例えば、對抗馬のいなくなった木村誓太郎⁽³²⁾を第二

区へ移し、自由党の鈴木充美⁽³³⁾と争わせ、そして空いた第三区へ和波久十郎を立候補させたりしている⁽³⁴⁾。「図3⑤」。特に、大石正巳⁽³⁵⁾の「第四区婚入り」を積極的に支援する姿勢が読み取れる⁽³⁶⁾。ただし、第四・五回総選挙を契機として、尾崎は自らの地盤に対する積極的な行動が少なくなり、大石の第四区対策なども、森本や白井以下の好友会員が第五区対策を放置したような状態で活動している。なお第四区は、矢主勝之⁽³⁷⁾一一九二票に対し、大石は一〇八一票で惜敗した。

進歩党は同年六月に自由党と合同して憲政党となり、初めて政党主体である隈板内閣の成立を見た。この憲政党合同に際して、森本と白井は憲政党三重県支部の役員へ就任している。しかし、第五区の範疇では、旧自由党と旧進歩党の合同は進んでいなかった。以前において自由党系の組織だった正義会は勢力を衰退させ、役員が離脱したため有名無実の状態だったと考えられる。その正義会に替わる、新たな自由党系組織として、憲政党合同直前の五月一日に「公同会」が発足していた。好友会と公同会は、中立派も含めた三派合同を模索していたものの、結論を得ず、そのまま憲政党瓦解を迎えた。合同の機会を得なかった好友会と公同会は、以後においても敵対関係を繰り広げる。

県選挙抜粋
度会郡区は定員4名
「☆」好友会

〔明治三一年まで半数改選制〕
(関係者のみ)

明治一五年三月 半数改選
☆(改選) 喜多正兵衛

明治一七年二月 半数改選
☆ 喜多正兵衛

明治一八年一〇月 半数改選
☆(改選) 喜多正兵衛

明治二〇年一〇月 半数改選
☆ 喜多正兵衛

〔明治三一年まで複選制〕
(以下全員)

明治三三年三月 半数改選
☆(改選) 乾逸太郎

(改選) 北川矩一
藤井市八
☆ 喜多正兵衛

北川衆院当選による辞職
北川の補欠選挙(八月)
☆(補当) 白井清栄門

明治二五年三月 半数改選
☆(改選) 喜多正兵衛

(改選) 奥山宇吉
☆ 乾逸太郎
☆ 白井清栄門

明治二七年三月 半数改選

☆(改選) 乾逸太郎
☆(改選) 白井清栄門
☆ 喜多正兵衛

明治二九年三月 半数改選

☆(改選) 喜多正兵衛
☆(改選) 船越楫吾
☆ 乾逸太郎
☆ 白井清栄門

〔以後、複選制・半数改選廃止〕

明治三一年五月 選挙

☆ 高瀬章二
☆ 船越楫吾
☆ 白井清栄門

高瀬辞職により
☆(補当) 喜多正兵衛

明治三二年一〇月 選挙
☆ 高瀬章二
☆ 白井清栄門

村井恒蔵
奥村亨一郎

明治三六年八月 選挙

村井恒蔵
乾逸太郎
堀井繁夫
山中崔十

図2 県会議員に占める好友会員の割合

八月には、憲政党を中心とした第六回総選挙が実施された。阪上順夫氏は、この第六回総選挙を評して「森本にトップの座を奪われたが……」と述べているが、これは得票だけを見たに過ぎず〔図1⑥〕、憲政党や三重県下の状況とも合わせて、森本という人物のことを考察していない。同志である尾崎・森本間に票差は関係ないものの、森本が尾崎を抜いた理由は、尾崎が帰県していないためである。第五区は、尾崎が選挙活動を行わなくても済むような無風状態で、兩人とも当選を果たした。

三重県内全域に目を転ずると、尾崎文部・大石農商務の二大臣を擁したためか、旧進歩派に有利な調整が行われたと思われる。特に、大石は憲政党三重県支部の調整により、第四区の公認候補となったため、平易に当選を果たした〔図3⑥〕。他の選挙区でも、二区木村・三区和波は当選を維持し、六区では森川六右衛門が二回の雪辱を果たして初当選となった。一区栗原の牙城を切り崩すことは無理としても、実に県下一選挙区一人を除き、すべてが旧進歩派で占められた。そして、憲政党瓦解により、旧進歩派は憲政本党となったため、結果的に三重県下では圧倒的な憲政本党有利へと至った。

尾崎・森本・好友会は、実質的な進歩党（憲政本党）三

明治期における尾崎行雄の選挙（二）（渡辺）

重県支部の役割を果たしているが、この第六回総選挙で結果的ながらも最高潮を迎えたと言えるだろう。しかし、翌年になると和波・森川が党籍離脱を表明し、ほぼ定員通りの三・四名を保持し続けた県会度会郡区議席も二名にまで落ち込んだ〔図2〕。最高潮の時期は極めて短く、むしろ翳りすら生じるようになった。

三 好友会の斜陽

（二）政友会移籍

尾崎は、改進黨結成当初からの重鎮であり、そのまま進歩党・憲政党・憲政本党へと党籍が移動した。ただし、明治三三年九月の伊藤博文による政友会創立に際し、尾崎は憲政本党を離脱してまで参画するという、やや理解に苦しむ行動を執った。³⁹これは、今まで築き上げた地盤、特に最高潮へと達した態勢すべてを放逐しかねないほどの短絡的行動と言えるだろう。「森本確也宛尾崎行雄書簡」No.11は、その直後の書簡である。⁴⁰尾崎は「同志の人を一切誘はなかつた」としているが、一蓮托生とも言える森本だけは、直ちに党籍を政友会へ移動している。また、書簡中にある「白井氏上京頻に老兄を探し居候へ共、御宿所不明に付帰

県致候。」とは、憲政本党離反の詳細説明を得るため、わざわざ上京した白井に対し、恐らく森本は面会を回避したのである。尾崎の移籍により、むしろ最も悪影響を蒙ったのは、実質的に尾崎の代わりとして地盤を預かる森本だったかもしれない。そういった森本の苦悩と、白井や好友会の混乱を尻目に、尾崎は「第五区の同志者は多分暫く政党以外に中立する事に可相成乎と存候。小生は寧ろ之を勧め置候。」などと述べ、平然としている様子が窺える。一ヵ月後の書簡⁽⁴³⁾においても、「県地の方は別段の事もなかるへしと存候。」という認識に過ぎない。このような暢気さが、後の第七回総選挙で致命的打撃となる。

なお、好友会は尾崎の「政友会入り」に全面的な賛同を寄せたとは考えづらく、憲政本党所属を固持し、政友会への党籍移動は行っていないようである。尾崎支援組織ではありながら、今まで通りの党勢拡張を行うほど、それが尾崎との乖離に繋がるといふ、いわば「ねじれ現象」が生じた。

(二) 第七回総選挙

第七回総選挙は尾崎にとって最も苦戦した選挙と推測されるが、詳細は拙稿「明治期における尾崎行雄の選挙⁽⁴³⁾

(1)」に譲り、その原因を要点のみ纏めてみる。①内的要因として、党籍変更後も「甘い地盤固め」「党務絶対優先」に終始する尾崎と、このような態度や「ねじれ現象」に苦慮する好友会、そして森本の出馬問題。②外的要因として、政友会移籍により同志となつたはずの公同会や栗原に脅かされる地盤と、南牟婁郡での竹原樸一の反乱。③突発的要因として、浜田国松立候補と、それに間接的な関係を持つ度会商工銀行の破綻。

落選に近い辛勝ながら、それでも当選を果たせた最大理由は、やはり森本と好友会であった。森本は、自身の出馬問題で尾崎と関係悪化に至ったが、妥協・支援に転じ、志摩郡の地盤を提供した。好友会も、憲政本党所属に拘泥するならば、大石正巳へと奔る筈であるが、度会郡での大石の得票は六五票に止まっている。好友会は斜陽化に至りつつも尾崎支援を貫き、公同会や浜田の侵蝕も当落紙一重での必要最低限に喰い止めた。これら度会・志摩郡の票が、尾崎当選の直接原因である。

しかし森本・好友会のみへの依拠は、旧五区内に大きな影響を与えても、郡部選挙区(県下全域)への得票に結びつく強い影響力とはならなくなっていた。いわば、尾崎も含めて第七回総選挙は小選挙区式の対応だったと言えるだ

① 第1回総選挙 M27.3.1

第1区	○栗原亮一	1,605	弥生
第2区	○牛場卓蔵	1,557	
その他		12	

第1区	○伊東祐賢	1,116	大政
第2区	○長井氏克	945	大同
第3区	○林道水	633	
第4区	○今井実然	623	
その他	○岡本民雄	396	
	その他	524	

第1区	○天春文術	1,007	弥生
第2区	○木村誓太郎	962	改
第3区	○久松義典	156	
その他		208	

第1区	○伊藤謙吉	1,798	弥生
第2区	○南部龍之助	441	
第3区	その他	29	

第1区	○立人奇一	1,798	議集
第2区	○福地次郎	441	弥生
第3区	その他	29	

② 第2回総選挙 M25.2.15

第1区	○牛場卓蔵	1,552	中央
第2区	○栗原亮一	1,431	自
その他		16	

第2区	○伊東祐賢	3,035	独立
第3区	○小川義郎	663	実業
その他		272	

第3区	○天春文術	1,649	弥生
第4区	○木村誓太郎	494	改
その他		72	

第1区	○伊藤謙吉	1,189	独立
第2区	○土居光華	823	自
第3区	その他	210	

第1区	○立人奇一	1,262	議集
第2区	○福地次郎	1,209	自
第3区	その他	3	

③ 第3回総選挙 M27.3.1

第1区	○栗原亮一	2,065	自
第2区	○森川六右衛門	908	改
その他		22	

第1区	○鈴木充美	2,153	自
第2区	○伊東祐賢	1,991	同志
その他		8	

第1区	○木村誓太郎	1,107	自
第2区	○天春文術	1,030	自
第3区	その他	8	

第1区	○土居光華	1,161	自
第2区	○乾学郎	1,041	自
第3区	その他	6	

第1区	○深山健雄	1,456	自
第2区	○立人奇一	1,037	改
第3区	その他	4	

④ 第4回総選挙 M27.9.1

第1区	○栗原亮一	2,064	自
第2区	○伊東祐賢	572	革新
その他		151	

第2区	○鈴木充美	3,179	自
第3区	○伊東祐賢	477	革新
その他		107	

第3区	○木村誓太郎	1,169	自
第4区	○天春文術	1,063	自
その他		5	

第1区	○土居光華	1,525	自
第2区	○乾学郎	428	自
第3区	その他	52	

第1区	○深山健雄	1,372	自
第2区	○森川六右衛門	1,259	改
第3区	その他	7	

⑤ 第5回総選挙 M31.3.15

第1区	○栗原亮一	1,777	自
第2区	○小川義郎	965	
その他		82	

第1区	○木村誓太郎	2,448	進
第2区	○鈴木充美	1,441	自
その他		25	

第1区	○相波久十郎	1,416	山下
第2区	○下田亨三	718	自
第3区	その他	28	

第1区	○矢士勝之	1,192	自
第2区	○大石正巳	1,081	進
第3区	その他	12	

第1区	○深山健雄	1,397	同志
第2区	○森川六右衛門	1,244	進
第3区	その他	2	

⑥ 第6回総選挙 M31.8.10

第1区	○栗原亮一	1,395	憲
第2区	○小川義郎	458	憲
その他		161	

第2区	○木村誓太郎	2,164	憲本
第3区	○鈴木充美	1,852	憲
その他		19	

第1区	○相波久十郎	1,076	憲本
第2区	○森茂生	975	憲
第3区	その他	94	

第1区	○大石正巳	1,768	憲本
第2区	○奥野市次郎	427	憲
第3区	その他	50	

第1区	○森川六右衛門	2,294	憲本
第2区	○深山健雄	353	憲
第3区	その他	53	

図 3

第5区を除く三重県下得票数

M33.9 補選 平田力之助

和波久十郎 失格

ろう。大選挙区制では、固有地盤と合わせて、県内他郡部での効果的な得票も必須となる、これは選挙後に各候補者が痛感して意識したことで想像される。

四 好友会の衰退

(一) 第八回総選挙

第一七議会で、政友会・憲政本党ともに地租増徴断固反対に徹し、衆議院は解散となった。明治三十六年三月に行われた第八回総選挙であるが、増租反対が選挙民の圧倒的な支持を受け、また前回の選挙から七ヵ月しか経過していないこともあり、政友会・憲政本党間での調整が諮られ、前職優先の方針が執られた。このことは、第七回総選挙で大苦戦した尾崎に「追い風」となった。

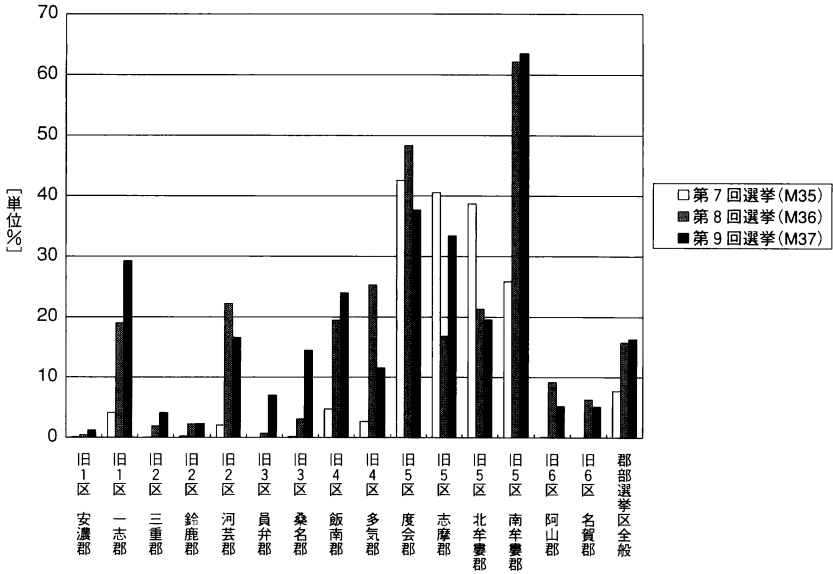
政友会三重県支部の実情は一転し、栗原が尾崎を連れて遊説するほどであった。一志・河芸郡の得票増加は「グラフ」、その影響と考えられる。また、大石正巳は選挙区を郷里である高知へ移したが、後継者へ津市の松本恒之助⁽⁴⁵⁾を指名するという奇怪な行動により、旧四区が空白となった。大石の「四区婿入り」を画策したのは尾崎であり、当然の結果として旧四区の尾崎票が飛躍を遂げた。第七回総選挙で遺恨の残った森本は、政友会を離脱して単独出馬

し、尾崎との袂を断った。ただし、尾崎を峻拒して擠陥するまでの意図はなかったようであり、自らが地盤とする志摩郡を除いて旧五区には侵蝕せず、旧六区に依った⁽⁴⁶⁾。このような理由で、旧六区は尾崎にやや寛容であったためか、尾崎票は若干程度の伸びを見せている。

以上のことから、第七回総選挙で旧五区以外の得票が極めて少なかった尾崎にとって、第八回総選挙は北勢進出の大きな契機となった。そのような尾崎の北勢進出に対して、好友会は佐伯市太郎が旧五区内の南牟婁郡などへ随行しているものの、他郡部への独自の運動は行い得ていない。以前の「大石正巳四区婿入り」を実現させたような、五区以外の地へ影響を行使できる勢力は、すでに好友会には存在していなかった。

浜田国松は、西田周吉⁽⁴⁷⁾が速水熊太郎⁽⁴⁸⁾支援に廻ったためか、前回以上の敗北を期した。しかし、宇治山田侵蝕を諦めた訳ではなかった。総選挙後に行われた度会郡区県会選挙で、好友会は白井以下の候補者すべてが落選し、完全に議席を失った「図2」。当選者の山中崔十は一部好友会を脱会して立候補し、乾逸太郎は元好友会員である。一部好友会中枢も、度会商工銀行事件で辻村弥八が切り崩され、杉本齊之助も脱会を宣言した。また、宇治山田町長だった

明治期における尾崎行雄の選挙 (二) (渡辺)



グラフ 尾崎行雄郡部選挙区得票率

吉沢重郎は、「郡会議員選挙人名簿作成で失態があった」として懲戒免職になっている。これら一連の好友会衰退に繋がる事案は、すべて浜田に利することとなった。

(二) 第九回総選挙

地租増徴案は、伊藤博文政友会総裁が単独・秘密裏に桂太郎首相と妥協したため、政友会は大混乱に陥った。憤慨した尾崎は政友会を脱党する。混乱したまま第一八議會を迎えたが、奉答文事件により、直ちに衆議院は解散された。

明治三十七年三月に第九回総選挙は行われたが、日露戦争の最中だったことや、前回の選挙より一年しか経過していなかったため、再び前職優先の処置が執られた。さらに、政友会不振の直撃を受けた三重県支部は、選挙に対する統制能力すら失っていた。これらの状況により、脱党後も準政友会派であった尾崎は、政友会で旧自由党古豪の天春文衛⁽⁴⁹⁾から、旧三区の票を若干ながらも獲得している「グラフ」。

旧五区に関しては、ついに浜田国松が初当選を果たした。宇治山田を中心とする度会郡に侵蝕を続ける浜田であったが、公同会の取り込みで成功し、それが当選の一因

となつたようである。このことを実証するように、栗原は度会郡での得票を激減させている。⁽²¹⁾ 宇治山田政界の併吞を企図する浜田にとって、残る目標は衰退化の一途を辿る好友会だけであつた。

(三) 第一〇・一一回総選挙

日露戦後から大正政変までの間は、桂太郎と西園寺公望による政権交互担当期であり、「桂園時代」と呼ばれている。尾崎は、明治三六年六月より四五年六月まで東京市長に就任しており、この「東京市長期」が桂園時代とほぼ合致する。尾崎は桂園時代を振り返り、「藩閥と政党との妥協政治が、十年あまりも続いた。丁度私が東京市長をして、政治運動から遠ざかつていた時代である」⁽²²⁾（傍点筆者）と述べている。確かに、政友会離党後の尾崎は、同志研究会・無名倶楽部・政友倶楽部・猶興会・又新会と小会派を渡り歩き、明治四二年には政友会へ復党するものの、以前のような活発な政治運動を行っているとと思えない。激務である東京市長職に加えて、体調不良や前妻死去も原因と考えられるが、「政治的空白の十年」と言えよう。この間に行われたのが第一〇・一一回総選挙である。

「政治的空白の十年」に行われた第一〇・一一回総選挙

に關しては、的確な史料がなく、伊勢新聞も詳細を明らかにしていない。尾崎の苦戦を伝えるが、投票の直前を迎えると急に優勢へと転ずるような記載が見受けられるのみである。東京市長という顯職に就任しているとはいえ、政治的活動に消極的な尾崎であり、しかも好友会は崩壊寸前の状態となつている。このような様相でありながら、尾崎は優勢な選挙戦を展開しており、これには不可思議な観さえ覚える。詳細は不明であるが、優勢を維持できた理由として、第一〇・一一回総選挙は、満期による選挙の割には立候補者が少なく、かつ「輸入候補者」の多いことが挙げられる。また、郡部選挙区に蒔かれた種の萌芽とも考えられる。それでも、明治四一年の第一〇回総選挙では、好友会・三重銀行ともに存在中で、衰退しながらも支援は可能であつた。

ただし、明治四二年に三重銀行は破綻し、明治四三年の好友会解散で、宇治山田の地盤は公同会・中立派とともに「神都倶楽部」という名称を冠する浜田支援組織と化する。

明治四五年に行われた第一一回総選挙の様相は、さらに不明である。県内の状況は、日糖疑獄により栗原が引退そのまま死去し、第一回総選挙からの古豪は尾崎を除き消滅した。旧五区の様子は、好友会は解散したものの、度会郡

北西地域の二部は健在であり、引き続き支援活動を積極的に行っている。宇治山田でも吉沢重郎が神都倶楽部の間隙を突きながら活動していた。森本も、尾崎との関係は完全な断絶ではなく、苦戦による要請があれば、ある程度の支援を行い、志摩郡の票を提供したようである。⁽⁵³⁾これらの理由により、好友会解散後ではあるが、宇治山田を除く旧五区の中枢地盤は辛うじて維持が可能だったと想像される。また、旧五区を立脚地とする対立候補が浜田だけであったことも幸いした。この中枢地盤と、恐らく知名度による北勢からの投票が、当選を可能にしたと思われる。

おわりに

好友会の推移を見てきた。罌堂会との違いは、宇治山田の三重銀行関係者と弁護士などが中心となって構成され、中枢構成員を宇治山田町会―度会郡会―三重県会へ送り込むという、一般的な候補者と変わらないような組織だったことであろう。また、尾崎支援組織であると同時に、宇治山田政界を中心とした改進黨（進歩党・憲政本党）の党勢拡張組織だった。所属政党よりも自分の思想信条を優先させる傾向にあった尾崎ではあるが、この当時においては党務や党勢拡張に尽力している。しかし、三重県内の党勢拡

張に関しては、実質的に森本と白井以下の好友会が行ったものと言える。

そして、無条件で尾崎を受け入れるような資質があったことも事実であろう。このような面が、やがて好友会が衰退した時に、罌堂会へ推移できる素地になったと考えられる。大正政変を経て「憲政の神様」となった尾崎であるが、政変後に行われた大正四年の第一二回総選挙で、今後の様相を完全に決定づけるほどの絶対磐石となり、罌堂会も正式に発足した。好友会式の不安要素を払拭した、罌堂会式選挙の成立でもある。それを見届けたように、翌年に行正が没する⁽⁵⁴⁾。

好友会式の選挙とは、「憲政の神様」以前の選挙でもあった。その好友会式を引き継いだのが、浜田であったと言える。浜田は尾崎から宇治山田市の地盤を奪ったが、支援組織（神都倶楽部）の様相は、中枢構成員を宇治山田市会―県会へ送り込むという、好友会と変わらない手法であった。合わせて、壮絶な宇治山田政界の対立まで引き継ぐこととなる。

この好友会という組織を、なぜ尾崎は記録に残さなかったのであろうか。好友会式の選挙は、中枢構成員の町会・郡会・県会選挙を支援する煩わしさ、地盤で党勢拡張を行

う煩わしき、そして宇治山田を中心とした激しい政争に対応する煩わしきが付随する。罌堂会式選挙への移行は、こうした要素からの解放でもあった。そのような煩わしきを、「憲政の神様」として絶対磐石な態勢を保持できた尾崎は、思い出しただけだったのかもしれない。

なお、本稿は森本確也宛尾崎行雄書簡と伊勢新聞のみに依拠している観が強い。特に第八回総選挙以降は推測が多く、かなりの空白部分を残していると言える。好友会・公会関係者の地域史料発掘などにより、後世の研究において空白部分を解明して貰えれば幸甚である。

註

- (1) 坂上順夫『尾崎行雄の選挙―世界に誇れる罌堂選挙を支えた人々―』（和泉書院、平成十二年）、相馬雪香／富田信男／青木一能編著『罌堂尾崎行雄』（慶應義塾大学出版会、平成十二年）、伊佐秀雄『人物叢書尾崎行雄』（吉川弘文館、昭和三十五年）。
- (2) 主として『尾崎行雄全集第十巻』自叙伝・回顧録（平凡社、昭和二年）と、『尾崎罌堂全集第十一巻』罌堂自伝（公論社、昭和三十一年）を参照した。
- (3) 拙稿「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」（『法政史学』六八号、平成一九年九月）、拙稿「明治期における尾崎行雄の

選挙（一）―第七回総選挙の諸相―」（『法政史学』六九号、平成二〇年三月）。なお、これらの拙稿と本稿は実質的な連作であるため、併読を願う次第である。

- (4) 明治三年に至る三重県内の政治組織結成過程は、西川洋「1887―89年の三重県地域自由民権結社」（『三重大学法経論叢』三巻二号、昭和六一年三月）に概要が述べられている。

- (5) 国会図書館新聞資料室所蔵『伊勢新聞「マイクロ版」』明治二三年五月十一一面。以下、国会図書館新聞資料室所蔵『伊勢新聞「マイクロ版」』は、『伊勢新聞』と略す。

- (6) 前掲『尾崎罌堂全集第十一巻』二〇九頁。
- (7) 『伊勢新聞』明治二三年七月二七日一面。

- (8) 前掲『尾崎罌堂全集第十一巻』二〇九頁。

- (9) 伊勢市旅館「紅葉軒」所蔵

明治（ ）年（ ）月10日付 尾崎行正宛尾崎行雄書簡

拝啓托高瀬一書謹呈仕候。尊諭の条々は委細謹承仕候。

一 曠山株券の事は、山羽白井等重立たる人々と熟議を遂けたる後なれば、却て後来悪感情を生ずへしと痛心罷在候間、高瀬氏より委曲御聞取被下度候。

一 長合羽は不日拝送可仕候。

一 大隈伯の名義（株券に）を用いるは容易に承諾

を得がたかるへし。尚ほ様子を聞合せたる上、重ねて可申上候。他にも一二人は応ずる者あらん。

一 千代行武等の事は追て可申上候。

先は右取急ぎ。草々不尽

十日

父上様

行雄

この書簡は、年代推定不明であるが、尾崎から行正へ明治二〇〜三〇年代に出されたものと想像される。一瞥すると家政だけの記述に見えるが、「山羽白井」は後述する好友会の概要構成員であることや、改進黨（進歩）党党首・大隈重信の名も見られるため、行正の政治性を感じることとも可能と考えられる。

(10) 前掲『尾崎行雄全集第十巻』四九五〜四九七頁。

(11) 鶴殿村長・南牟婁郡会議員・三重県会議員・政友会三重県支部長などを長く務め、後の大正十三年・第一回総選挙では憲政史上最高齢の七三歳で衆議院議員への初当選を果たした。初当選に至る過程で、第二・六・七回総選挙に落選しているが、特に第七回総選挙での「反乱」は尾崎を揺るがした。

なお人物解説に関しては、国會議員経験者は各種議員名鑑・廣新二『日本政治史に残る三重県選出国會議員』（廣新二、昭和六〇年）・『国史大辞典』を、国會議員以外の第五区を中心とした人物は服部英雄『三重県紳士録』（三重

明治期における尾崎行雄の選挙（二）（渡辺）

県紳士録編集会、大正四年）・中村英彦原著／川端義夫校訂『度会人物誌』（古川書店、昭和五〇年）・三谷敏一『神

郡名家集』（三谷敏一、明治三四年）・三宅磯市『勢伊志紀顔見立評判記』（三宅磯市、明治二二年）をそれぞれ参照とし、一部に補足を加えた。

(12) 『伊勢新聞』明治二五年三月二七日二面。

(13) 『伊勢新聞』明治二五年四月一九日三面。

(14) おおむね現在の度会郡小俣町（平成一七年十一月に伊勢市と合併）・伊勢市川端町周辺・度会郡玉城町が該当する。

(15) 拙稿「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」五七頁にて、「第一部が宇治山田町、第二部が宇治山田を除く度会郡」と説明したが、やや精緻を欠いた。厳密には、ここでの記載が正しい。

(16) 文久三年に生まれ、宇治山田町会議員・宇治山田町長・県会議員・同参事会員を歴任した。また、三重銀行頭取や参宮鉄道会社社長代理を務めるなど、事業家としての面も持つ。歌舞伎『伊勢音頭恋寝刃』で登場する伊勢古市妓楼「油屋」の第一〇代当主（十代目清右衛門）であったが、旅館に転業し、その際に「清栄門」と改名した。昭和七年に没する。

(17) 志摩郡鵜方村（現、志摩市阿児町鵜方）出身、文久二年生まれ。三重師範学校を経て同人社英学科・漢学科卒業。三重県会議員・同常置委員などを経て、第三〇・三六・三八回総選挙に当選する。実業家としては、三重県農工銀行頭取を

長く務めた。志摩郡有数の大地主だったこととも合わせて、昭和二年に没するまで三重の政財界へ影響を与えた。

- (18) 前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」六九頁のNo.24書簡を参照。

- (19) 白井と森本を除く六名は、『伊勢新聞』の好友会に関する記事から氏名を判断し、さらに銀行関係者は『伊勢新聞』の広告に依った。なお、尾崎二呉は明治三二年に没している。

- (20) 安政五年生まれ、宮崎学校での尾崎の同級生。度会郡書記・宮後町戸長・宇治山田町会議員・宇治山田町収入役・宇治山田町助役を経て宇治山田町長に就任するが、郡会議員選挙名簿作成に失態があったとして懲戒免職となる。以後は八日市場町総代を長く務めた。初代罌堂会長。

- (21) 明治元年に生まれ、三重師範学校から東京法学院を卒業し、宇治山田町岡本や県内各地に弁護士事務所を開く。宇治山田町会議員・度会郡会議員を経て、第七・八回総選挙に落選、第九回総選挙からは十二回連続当選を果たし、衆議院副議長・同議長にも就任する。衆議院当選後は宇治山田市会議員・同議長も務めた。

当初の浜田は好友会に所属し、若年ながらも重要な位置を占めていたようである。しかし、第七回総選挙に単独出馬したため、好友会を除名処分となる。

- (22) 明治二三年に杉本斉之助などと度会青年会を結成し、翌二三年より尾崎派支援組織に入り、そのまま好友会発足に

加わる。後に三重セメント常務、宇治山田市会議員・同議長となる。

- (23) 明治法律学校卒業。明治二三年に佐伯市太郎とともに度会青年会を結成したが、佐伯とは異なり自由党派の正義会へ入り、実質的な領袖となる。その後、正義会を離脱し、憲政党合同の頃に好友会へ所属したと思われる。一部好友会の論客的存在であったが、好友会衰退とともに浜田支援へと転じた。後述する神都倶楽部の重鎮となり、三重県会議員・同参事会員を経て、県政同志会（県会議員の浜田派組織）の幹部として活動する。

- (24) 開業医。度会郡大湊町会議員を経て同町長に就任する。好友会員であったが、明治三八年に離脱・出馬して県会議員となる。

- (25) 度会郡大内山村会議員・同村長を長く勤める。明治二三年より県会議員に就任していたが、明治三十一年に不出馬と好友会離脱を表明した。しかし、詳細は不明であるが、政界隠居の身でありながら、突如として明治三十六年の県会選に出馬し当選する。

- (26) 註9で示した書簡にある「高瀬」は、この高瀬章二を指していると考えられる。なお、行正と高瀬は度会郡城田村川端（現、伊勢市川端町）に居住している。

- (27) 前掲『尾崎罌堂全集第十一巻』二五七～二五九頁。

- (28) 明治六年に慶應義塾教師となり、累進して同教頭・副社頭・評議員・臨時塾頭を務める。また、千代田生命保険社

長・千代田火災海上保険社長・時事新報社会長となる。第三回総選挙落選後は政界進出に意欲を示さなかったものの、昭和七年から死去する昭和十三年まで貴族院議員（勅選）へ就任した。

(29) 鳥羽藩士の家に生まれる。板垣退助らの民権議院設立建白を支持し、立志社を経て自由党結成に加わった。自由党・憲政党・政友会に所属し、板垣内相秘書官や大蔵省参事官を歴任するほどの重鎮であり、「板垣退助の懐刀」「自由和尚」などと呼ばれた。

第一回総選挙から三重第一区より出馬し、連続十回当選を果たす（厳密には第二回総選挙で落選しているものの、第四区より補選で当選している）。志摩郡鳥羽町出身であるため、第五区からの出馬が自然と思えるものの、第一回総選挙で第一区の同志から立候補を懇願され、そのまま第一区が立脚地となった。ただし、第五区に隠然たる勢力を持ち、正義会の実質的な指導者として、尾崎・森本や好友会などの改進黨勢力と対峙することになる。

(30) 京都府出身。京都師範学校教員・下京区書記を経て、京都府会議員・下京区会議員となる。また、公論新報・自由新聞・東京新聞・京都日報などの記者を勤める。第三回総選挙での三重第五区からの出馬に際し、「溝口」を「奥野」へと改姓する。いわゆる「輸入候補」であるが、自由党の若手論客とも言える奥野を、恐らく板垣・栗原が画策して第五区に招致したと想像される。第三回総選挙落選後も、

自由党の「消極的対立候補」として第六回総選挙まで第五区での活動を続けるが、大選挙区制となった第七回総選挙では郷里の京都市選挙区から出馬し、連続三回当選する。

(31) 前掲『尾崎畧堂全集第十一巻』二五八―二五九頁。

(32) 員弁郡北大社村の名門豪農に生まれる。若くして改進黨員となり、三重県会議員・同副議長・同議長を経て、第三（七）回総選挙に当選。以後は貴族院議員（多額納税）に転じ、明治三十七年から大正七年まで就任する。古豪の改進黨員であり、後述する同じく古豪の自由党員・天春文衛と激しい選挙戦を展開した。

(33) 鈴鹿郡神戸村生まれ、弁護士。東京帝国大学法学部を卒業し、朝鮮領事・香港領事として勤務する。隈板内閣では内務次官に就任した。第三（四）回総選挙に当選。

(34) 大隈重信関係文書（早稲田大学大学史料センター編）

295―19 明治（29）年（ ）月11日付 大隈重信宛尾崎行雄書簡

拝啓 本書持参の和波氏者北勢の徳望家にて、他日は木村誓太郎氏の後を承けて議員となるべき人物に御座候。本年勢地御漫遊の節津市にて拝顔せるのみならず、前年条約改正騒ぎの節などは頻りに尽力したる人に御座候。御閑暇の際御面晤相願度候。

十一日

行雄

大隈先生侍史

この書簡の他に、前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」六三頁のNo 3 書簡では、「二区の充美を攻め落すの法計御運らし被下度候」との記述が見られる。

- (35) 高知県出身。自由党創始者の一人であるが袂を分かち、後に大隈重信の側近として進歩党重鎮となる。松隈内閣の農商務次官、隈板内閣の農商務大臣を務める。第六回総選挙より連続六回当選。高知出身ではあるが、尾崎の招致により第五回総選挙で三重第四区から出馬するも落選し、第六回総選挙で雪辱を晴らした。第八回総選挙から郷里の高知へ戻り、旧自由党土佐派の内訌に乗じて、「改進黨と狐は土佐に棲まず」という俚諺を覆し、郡部選挙区よりの当選を実現させた。

- (36) 前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」No 9・33・41・45 書簡を参照。

- (37) 前掲「尾崎行雄の選挙―世界に誇れる罌堂選挙を支えた人々―」七四頁。

- (38) 前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」七〇頁のNo 26 書簡を参照。なお、翻刻の段階では年次が推定できず空欄とした。本文中へ記した理由により、年次は明治三二年と推定される。

- (39) 原因は、今もって明らかとなっていない。五百旗頭薫は、『大隈重信と政党政治』（東京大学出版会、平成一五年）二七七―二七八頁にて、その原因を「政権担当能力の

ある政党を尾崎は長年追求してきたが、野党時代が長引くにつれ憲政本党はこうした資質を失い、その対外硬論に至っては日露関係の調整を妨げかねないものであった。好意的に考えるならば、尾崎は伊藤の政党改革の理念に新しい可能性を見出したのであろう」と、「本人の弁明もまじえて推測」している。

- (40) 前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」六四頁。

No 11 明治(33)年9月10日

拝復 無事御加養中の山奉賀候。

老兄新政党え加盟の儀は過日武市氏等と同時に取置候間、左様御承知被下度候。政界異状なし。進黨の改革も愈々無望に相成候由にて、首藤三田村何れも失望して帰県せり。松島氏は単独脱党に取極候由。

白井氏上京類に老兄を探し居候へ共、御宿所不明に付帰県致候。第五区の同志者は多分暫く政党以外に中立する事に可相成乎と存候。小生は寧ろ之を勧め置候。小生一昨日表書の地え転居致候。

九月十日

森本兄

行雄

十五日の発会式には可成御臨場被下度候。

- (41) 前掲「尾崎行雄全集第十巻」五四三頁。

- (42) 前掲「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」六四頁のNo 12 書簡を参照。

(43) 尾崎自身も前掲『尾崎行雄全集第十巻』三六〇頁にて、「……私が幾んど落選しかけた事は、一度あつたが、それは私が多年養成した同志を棄て、政友会に入つたからである。」と述べている。

(44) 尾崎が得た票のうち、志摩郡は約一六%、度会郡は約五四%を、それぞれ占めている。合計では約七〇%となる。

(45) 津市出身。東京専門学校英語本科卒業を経て、津市議員・伊勢銀行取締役・伊勢鉄道社長・三重県農工銀行監査役などを勤める。この時期は伊勢新聞社長。第九、第十二回総選挙に当選。

旧四区での大石の後継者選定は確かに難航していたが、旧四区外である松本を後継へ据えるのには無理があつた。実際に、松本は準備不足とも合わせて、第八回総選挙では得票が伸びず落選し、郡部選挙区から津市選挙区へ移つて当選を果たした。このような後継者選定は無意味であり、大石の真意は不明ながら、尾崎へ旧四区的地盤を返すという配慮が働いたのかもしれない。

(46) 森本に六区的地盤を提供したのは、元進歩派で旧知の關係にある森川六右衛門であつた。森本への同情とも受け止められるが、森川には同じ旧六区から吏党系として当選している八尾信夫を追いつ落とすという目的があつた。ここで両者の思惑が一致したのである。その森川は、選挙後の明治三八年一〇月に死去した。

なお、季武義也『選挙違反の歴史―ウラからみた日本の

一〇〇年―』（吉川弘文館、平成一九年）では、九七、九八頁で旧六区の選挙買収事件を描いているが、九七頁に登場する第八回総選挙で八尾信夫の前へ現れた「有力なライバル」とは森本確也のことである。

(47) ホテル宇仁館経営者・伊勢朝報社長・志勢共同魚商会社社長。第七回総選挙においては、西田は浜田の参謀格であり、公同会の票を浜田に流すなどの工作を行った（詳細は前掲『明治期における尾崎行雄の選挙（一）』七六頁を参照）。しかし、西田と浜田の間には早くも亀裂が生じたようであり、第八回総選挙での西田は浜田を支援しなかつた。以後の西田・浜田間は、妥協の時期もあつたと思われるが、宇治山田政界を二分するような抗争を繰り返している。

(48) 北牟婁郡引本町出身。引本町会議員・県会議員・紀北商業銀行頭取・三重県農工銀行監査役を勤める。第八、九回総選挙に財産家の名望を駆使して当選。旧五区内の北牟婁郡出身であるため、尾崎の北牟婁郡での得票率が減少した「グラフ」。ただし、速水は明治三七年一〇月に死去したため、以後における尾崎の選挙には影響を与えなかつた。

(49) 朝明郡中野村出身。三重紡績会社社長・三重県勸業会会頭・三重県農工銀行頭取を勤める。朝明郡会議員・県会議員・同常置委員を経て、第一、二回総選挙に三重県第三区から当選。第三、四回総選挙では木村晋太郎に敗れ、明治三〇年四月から三七年九月まで貴族院議員（多額納税）と

なる。栗原と並ぶ三重県自由党の古豪であり、この時期では貴族院議員ながら、強い影響力を保持していた。尾崎に票を与えた理由を想像すれば、政友会で肩を並べていた時期もあり、また脱党後も準政友会の位置にある尾崎に対し、旧三区付近で立脚する森茂生・辻寛が非政友系だったためであろう。なお、天春は同年九月に貴族院多額納税議員の地位を宿敵とも言える木村誓太郎に明け渡すが、後の第一三・一四回総選挙で当選し衆議院議員への復活を果たす。

(50) 国会図書館憲政資料室収集文書「51 天春文衛宛書簡」

51-1 明治37年1月23日付 天春文衛宛尾崎行雄書簡

拝啓 小生事来る三十日三十一日の休暇に際し貴郡中の四郷、県、三重の各村にて演説会を開く見込にて目下交渉中に有之候間、右不愚御承知被下度候。老台も立たず平田氏も出さる時は貴郡内の投票は如何可相成乎。御差支なき限り小生へも御分配被下度希望の至に御座候。草々不尽

一月廿三日

天春様

行雄

(51) 栗原にとって、度会郡の得票は公同会による集票と考え、て間違いない。第七・九回総選挙での度会郡の投票率は、栗原が第七回約一八%・第八回約一八%・第九回約一〇%

であり、第九回総選挙で急激に低くなる様相が窺える。これは、浜田による公同会の取り込みが原因であろう。逆に浜田は、第七回約二四%・第八回約一〇%・第九回約三六%であり、第七・八回総選挙の増減は西田の影響、そして飛躍した第九回総選挙は公同会票であったと考えられる。

(52) 前掲『尾崎罌堂全集第十一巻』四五二頁。

(53) 拙稿「森本確也宛尾崎行雄書簡紹介」五八頁と、六一頁のNo.2書簡を参照。森本は浜田支援に廻ったようであるが、尾崎からの要請があれば、ある程度の支援を行ったと考えられる。

(54) 行正は、宇治山田町の草創期政治結社と調整しつつ、実際に地盤を固めたのが度会郡二部だったのではないかと想像される。尾崎の地盤は、好友会没落後は宇治山田から度会二部へ推移し、それが罌堂会の基盤になったと思われる。もしこれが事実であれば、行正は第一回総選挙で尾崎を三重第五区に導いただけでなく、度会郡二部という最高の地盤を尾崎に提供したと言える。実際に、行正没後において、尾崎は度会二部の重要性を認識していたためか、長男の彦磨を行正旧宅（現在の伊勢市尾崎罌堂記念館）に配置している。

(55) 宇治山田町に市制が布かれ、明治三十九年九月一日より宇治山田市となる。

〔付記〕

本稿は、前号・前々号に続き、平成一五年度日本史演習Ⅵ（学部近代史三年ゼミ）における成果の一つである。そして、ゼミで解明できなかった好友会のことを、ゼミ生有志と著者で小さな研究会を立ち上げ、探求を行った。その成果は、前号の「明治期における尾崎行雄の選挙（一）―第七回総選挙の諸相―」で結実したものの、肝心な好友会の全貌解明には至らなかった。年月を経ってしまったが、皆で集めた資料を埋めさせることが惜しく、不完全ながらも著者が代表して纏めたのが本稿である。特に、好友会の発足と解散の過程は杉本悟洋氏から、第二・三回総選挙に関する内容は井坂真澄氏から、それぞれ有益な多くの教示を得た。杉本氏・井坂氏は実質的な第二著者であることを明記しておく。